２０２６年度９月講座　感想まとめ

＜実行委員より＞

今年度の９月講座も現地とオンラインのハイブリット形式で開催しました。今回の講座には、中学校で日々実践を重ねておられる倉持紗月さんをお迎えし、「暗記型授業からの脱却」をテーマに、生徒が問いをもち、自分の考えを深めていく授業実践について御紹介をしていただきました。

講座の前半では、実践された授業での生徒の「社会は、知っていることをやるから面白くない」という言葉をきっかけに自らの授業と向き合う背景など、「暗記型授業からの脱却」というテーマについて考えるきっかけとなった話から始まり、子どもたちが考え続ける授業を倉持さんの実践から学ばせていただきました。自らの学んできた授業など面白いと思ったものを自分の中に落とし込み実践されているところにも学ぶべきことが多くありました。

講座の後半には、会場とオンライン別々にグループに分かれての意見交換の時間をもちながら、日々実践している教員や学生それぞれが、倉持さんの報告や自分たちの実践についての意見を交流しあい、「子どもが考え続ける社会科授業」について考える機会となりました。

今年度のハイブリット形式での講座では、現地での学びの深まりやオンラインを通して遠方の方との意見交流の良さを感じられる良い学びとなりました。倉持さんには、御多用の中、貴重な実践を御紹介いただきましたことに、心より感謝申し上げます。今回の学びを今後の授業づくりや校内研修に生かし、子ども達のより深い学びに繋げていきたいと思います。

＜講師の倉持紗月さんからの感想＞

この度は、授業づくり講座でお話しする機会をいただき、本当にありがとうございました。当日はとても緊張していましたが、埼玉からわざわざ駆けつけてくださった先生方の姿を見て、ほっと安心したことを覚えています。私自身、まだまだ学んでいる途中で、拙い実践報告だったと思いますが、皆さんが温かく耳を傾けてくださり、とても充実した時間となりました。

いただいた感想の中で、特にうれしかったのは、子どもたちの言葉から「問い」を拾うことや、戦争を「人」の視点から考えることなど、私が大切にしてきたことを、皆さんがそれぞれの視点で受け止めてくださったことです。

また、「歴史は義務教育に必要か」という問いを卒業前にもう一度考えてみては、というご提案には、なるほど！と思いました。同じ問いでも、学びを重ねた今の子どもたちなら、また違った考えが生まれるかもしれません。ぜひ、これからの授業づくりに生かしていきたいです。何より、皆さんとの意見交流を通して、たくさんの刺激と勇気をいただきました。お話ししているうちに、「社会科って、やっぱり楽しいな」「こんな授業もやってみたい！」と、次々にやりたいことがあふれてきたことが、今回の講座で一番心に残っています。

今回の報告も、これまで多くの先生方から学び、自分なりに試行錯誤してきた実践の一部です。これからも、たくさん学び、たくさん試しながら、子どもたちと一緒に社会科の面白さを探していきたいと思います。

貴重な機会と温かいお言葉を、本当にありがとうございました。今後ともご指導よろしくお願い

いたします。

＜参加者からの感想＞

子ども自身が社会科を学ぶ意義について考え、自分なりの意見をもつことができるような授業を行うことで、社会科を単なる暗記科目としてではなく、より深い学びの場として意識しなおすことができているように感じました。私自身、４月に教員になったばかりで「魅力のある問いづくり」ができていないことが課題です。今回の実践やグループワークを踏まえ、より良い授業が実現できるように頑張っていきたいと思います。貴重な機会をありがとうございました。　　（G さん・中学校教員）

久々に参加させていただきました。 ちょうど同じような課題を抱えていたので、参考になりました。明日からもやっていきたいと思います。　　（Y さん・特別支援学校教員）

授業開きなどアイデアから問いの作り方、生徒にどのようにして社会科を学ぶ理由を考えてもらうかなど、授業づくりをする上での課題や難しさについて考えることができてよかった。

（S さん・高校教員）

普段から、授業について考えていることがとても伝わり素敵だなと思いました。私は、鹿児島に住んでいるので、講和の中で鹿児島というワードが出てきた際にすぐ反応してしまいました。新婚旅行で訪れた土地の学校とオンライン繋いで交流したと聞いてびっくりしました。どのようなコミュニケーション能力があればそれができるのかとても気になりました。　　（S さん・学生）

倉持さんの学生時代からの社会科に関する問題意識や、今の生徒たちの実態やつぶやきを捉えての授業づくりが大変勉強になりました。「面白くない」「意味がない」など自分の学級の子どもたちも言うことがありどうしたらよいかとよく悩みます。倉持さんは「今しか見えていないから仕方ないが、その状況を変えたい！」と子どもたちの中に飛び込み、興味を引き出し考えたくなる問いを作り出してきたという話にすごく刺激と元気をもらいました。ブレイクアウトルームでは、「旅行先で知り合いを作ってしまうなんてすごい！どうやってるんですか？」という質問も出ました。先輩方から繋いできた実践に自分の工夫を重ねる授業、とても参考になりました。ありがとうございました。

（Y さん・小学校教員）

なぜ社会科を学ぶのか」という、子どもたちが抱く根源的な問いに対して、目を逸らすことなく真摯に向き合っていることが、本当にすばらしいと感じました。個人的には、現在、社会科の授業を担当しているわけではありませんが、資料としていただいた子どもたちの思いや意見は、ぜひ他の先生方や、自分が現在担当している子どもたちにも、そのまま見せたいと思いました。子どもたちがどのような思いをもち、何を考えながら学んでいるのかを知ることは、日々の授業を考える上でも大きな意味があると感じます。意見交流の場面では、同じグループに、今年から教員になったという若手の先生がいらっしゃいました。その方から、「子どもたちが楽しみながら、かつ、一生懸命考えたり、考

えを深めたりすることのできる授業を目指したいが、それを実際の授業として実現していくのは難しい」という話がありました。その言葉には、私自身も「全くその通りだ」と感じました。同時に、その難しさに向き合い、よりよい授業をつくっていくためのヒントが、今日の講座にはたくさんあったように思います。実践報告から学んだことはもちろん、グループでの協議や意見交流を通して得られた気付きも多く、さまざまな立場の先生方と学び合うことの意義を改めて感じることができました。実践報告、グループでの協議の両方を通して、多くの学びを得ることができました。貴重な学びの機会をありがとうございました。（M さん・小学校教員）

対面、オンラインともに参加者が多くて驚きました。それだけにグループ討議の質も充実していたと思います。 倉持さんの人に焦点を当てた授業、生徒の声をよく聞いて自分を振り返って授業改善につなげる姿勢が生徒の反応に表れていると思いました。私もその姿勢を忘れずにこれから児童の教育活動に向き合っていきたいです。（K さん・小学校教員）

生徒の声にアンテナを張り、ご自身が楽しみながら、今の社会と授業をつなげているところがとても素敵だなと思いました。「歴史は、義務教育に必要か」のディベートは、３年間の社会科学習の根幹に関わる問いであり、同じ問いを卒業前にしたら、生徒達にとっても教員にとっても、さらなる学びになるのではないかと思いました。私もやってみたいなと思いました。それを生徒との関わりから拾い出した力がすごいです。授業以外でも今までの積み重ねが感じられる講座でした。お聞きして、自分も力が湧く講座でした。ありがとうございます。（I さん・中学校教員）

新鮮な視点を得られた。対面のメリットを感じられた。（M さん・高校教員）

今回の倉持実践報告を聞きながら、以下の点でのすばらしさを感じました。一つ目は「問いは作るだけでなく、拾うもの」という発想です。子どもの発言のズレを察知し、そのズレを授業の中心に据える判断力、加えて予定した授業を捨てる勇気　これは授業が「生き物」になる瞬間で高度な技術だと感じました。二つ目は「歴史は義務教育に必要か」という問いの立て方の絶妙さです。この問いは一見すると挑発的だけれど、実に教育的だと思います。生徒の価値観を揺さぶり、社会科の本質に直結した問いであり、さらに「正解がない」という問いを授業の中心に据えるのは、教師として覚悟が必要ですが、それをあえて授業で取り上げる大胆さに感服しました。三つ目に戦争を「人」から考えるアプローチの丁寧さです。戦争を扱う授業づくりは難しいけれど、国ではなく人に、数ではなく物語に事実だけでなく想像力をという方向で授業を組み立てている。戦争単元を「人に立ち返る視点」で取り上げることは世界でも大切だと言われています。世界的に評価される方法を取り上げている点に共感をおぼえました。最後に報告のなかで「レプリカ」の発想を話されました。教師の授業は完全なオリジナルではなく、他者の実践×自分の経験×子どもの世界のかけ合わせでできている、大いに歴教協の先輩たちの実践に学び、その実践を自からの実践の糧にしてほしいと思いました

（S さん・小学校教員）

たいへんすばらしい話が聞けました。倉持さん、ありがとうございました。社会科は知ってることしかやらない」「社会科は必要なのか」などの意見は小学校でも時々聞く話で、関心をもって聞くことができました。倉持さんは、子どものその思いを受け止めて授業で考える機会をつくっているところがさすがだと思いました。子どもたちは、社会科に必要な力を、思考力、判断力など、知識よりは考える力だと考えている意見が多く、たいへん参考になりました。倉持さんが子どもたちに寄り添って実践している様子がよく分かる報告で、学びが多かったです。　　（I さん・小学校教員）

倉持さんの今回のメイン報告は、中学３年の授業開きで、「社会科は、義務教育に必要か」の取り組みでした。小グループでの話合いとディベートを通して、生徒たちに「この問い」について考えさせることをしました。中１、中２と地理・歴史を学習してきて、中学校の社会科の授業について多様な考えをもっているのが中学三年生だと思います。特に地理にくらべ、歴史の授業は現在を生きる自分になんの役にたつことがあるだろうと疑問をもつ中学生が多い実態があります。倉持先生はあえてディベートでは「歴史は、義務教育に必要か」という問いを生徒に提示しました。話合いでは「社会科」、ディベートで「歴史」を提示したことと、話合いとディベートを組み合わせておこなったことがこの授業開きがうまく行った要因だと思います。話合いにより他の生徒が社会科授業をどうみているかを知り、ディベートにより自分の社会科授業観がそんなに大きくではないでしょうが揺さぶられるでしょう。倉持先生は最後に持ち出した問いは「社会科とは、何を学ぶ教科だと思うか」でした。話合いとディベートを経て生徒たちはこの問いに【実際の子どもたちの声】で答えています。それらの答えをみると、生徒たちそれぞれが濃淡はありますが社会科を学ぶ意味を考えています。私なども授業開きで、社会科をまなぶ意味とか１年間どんなことを学ぶかなどを話しますが、それはいくら工夫しても教員が「押しつけている」と感じる生徒が多いと自覚しています。倉持さんのように生徒に問いかけ、自ら考えてもらうような授業開きは「押しつけ」とは正反対な授業で、とても新鮮です。教科学習に対するモチベーションは自分で高めていくのが一番いいと思います。倉持さんのこの実践にはこの点について大きなヒントがあると思いました。　　（T さん・特別支援学校教員）

竹早中以外の会場でのハイブリッドでの開催ということで、いろいろな心配がありましたが、土田さんの全面的なご協力によって、スムーズに講座がおこなわれたことに感謝します。倉持さんの実践は、井村さんの教え子として、大切なことを学んだという奇跡の出会いを十二分に活かした魅力溢れる内容でした。中３の生徒たちは、倉持さんが３年間で育んでこられた生徒たちなのだということも、よく分かりました。伝えたいことが溢れると、ともすると教員の思いが先行してしまうものですが、倉持さんは、生徒の言葉を大切に受け止め「自分で気づき、自分の意見を持ち、主張する」ことを大切にされていることに感銘を受けました。埼玉は、市内異動が多く、１時間半もかかるところに飛ばされることもある東京から見ると、教え子と対面で学び合える支部例会がうらやましく感じられてしまうのですが、東京でも埼玉の温かさに学んでいきたいと思いました。（K さん・中学校教員）